知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 ［ココナッツクラブ］

# COCONUTS CLUB

April 2022 4

## 桜並木を歩きませんか

# 桜並木を歩きませんか

季節がめぐり、今年も桜の季節がやってくる。
不安の多い世の中でも、毎年変わらず咲く桜が
私たちの心を癒してくれる。
さあ、家の中でくすぶっていないで、
地元の自慢の桜を見に出かけよう。

表紙写真：常滑市・矢田川河畔
扉写真：南知多町・桜公園

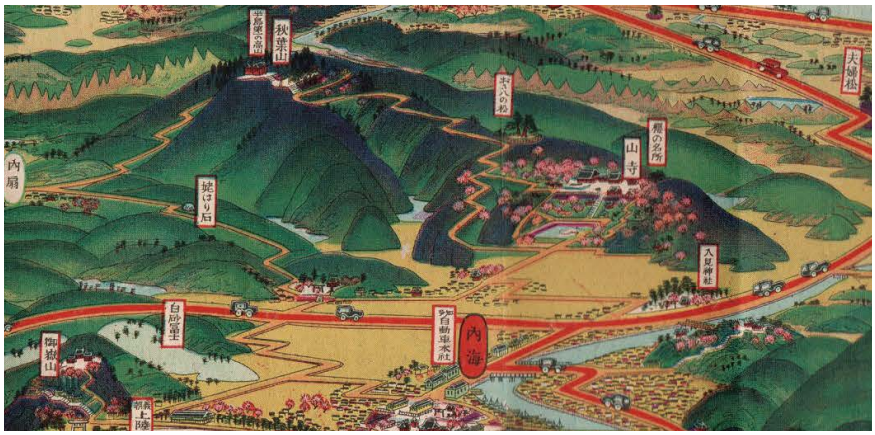
## 桜の寺と、桜の神社と

知多半島の桜名所として古くから知られていたのは、南知多町内海の持宝院だ。「山寺」の異名を持つこの寺は、深山の興趣と境内からの絶景で内海の観光名所の一つに数えられ、とりわけ山一面に咲き誇る桜が地域の自慢だった。幕末に刊行された地誌「尾張名所図会」の知多郡編にも絵入りで紹介されているほどで、また、昭和初期の観光ガイドマップにはこんな紹介文で旅人を誘っている。

山寺桜谷／（前略）境内及び近い山谷を所謂桜谷と呼び、桜楓数百株を持って埋めらる。春花秋葉雲にまがひ風景さながら変態動揺する書画にして、実に絶景の勝地である。陽春四月花の頃、料亭の出張もあって内海情緒にひたるもよく、遠近よりの観桜客が絶えない。

（「南知多内海御案内」より）

往時の持宝院はヤマザクラが中心だったが、明治以降にはまとまった数のソメイヨシノが知多半島のあちこちで植樹されるようになってゆく。古いところだと半田の「東雲桜」がそうで、明治四十四年（一九一一）に地元の有志が、東京の桜名所として名高い隅田川を模して阿久比川河口の堤防沿いに植えたのが




「天下の絶勝 南知多遊覧 交通名所図絵」（大正14年・部分） 南知多町教育委員会所蔵

# 古い社にも新しい町にも、華やかに咲き誇る桜はよく似合う。

始まり。戦時中、その堤防が軍需工業の資材置き場や食糧増産用地になったため多くが伐採されてしまうが、終戦からほどなくして観光協会によって復活。近年、「東雲桜ふんばり街道」と名付けられ、人気の散歩コースになっている。半田市ではこのほか、明治三十五年(一九〇二)に整備が始まった乙川白山公園、大正二年(一九一三)に開かれた雁宿公園の桜も歴史が古い。

CCNCのエリアの最古級は、常滑市奥条の常石神社参道の桜並木だろう。植樹の時期は定かではないが、昔の写真から推測すると大正時代の後半と思われる。約四〇メートルに五十本ほどの桜があり、植え直された若木も何本かあるが、多くは風格のある古木だ。豪快に捻れた太い幹と、縦にも横にも勢いよく伸びた枝ぶりは、老いてなお矍鑠としている。

## 桜とともに成長してきた町

知多半島で人気の桜スポットはそれこそ枚挙に暇がない。さすがに数が多すぎて全てを一度に紹介しきれないので、今回は桜並木に焦点を当ててみよう。まず武豊町でおすすめしたいのが、石川の桜並木である。

石川は本宮山の東斜面に源流を発し、長成池を経て半田市との境界付近を流れ、JFEスチール知多製作所付近で衣浦湾に注ぐ短い川だ。中流から下流にかけて河畔に桜が点在しており、中でも県道467号半田環状線の砂川橋から名鉄河和線までの約五五〇メートルが最大の密生地となっている。川の両岸に並ぶ木々は成熟した壮年のごとく堂々としており、満開ともなれば雲のようにたなびき、周囲の住宅も見えなくなるほど。川の中洲には菜の花も咲き、淡いピンクと黄色の取り合わせもいい。周辺人口が多いこともあって、最盛期には花見散歩を楽しむ人でなかなかの賑わいを見せる。

石川の桜並木は、武豊町砂川地区の住民を中心とする有志のグ

常滑市・常石神社

武豊町・石川河畔

農道に続く桜並木も、立ち止まって眺めたい。

ループ「あじさいの会」が世話をしている。会長の大岩保さんによるとこの桜並木は、武豊町内に住む昭和十九年(一九四四)生まれの人たちが厄年を迎えたのを記念して、昭和五十九年(一九八四)に植樹したものという。

当時、この一帯では大規模な宅地化が進行中だった。かつては一面に田んぼが広がる純農村だったが、産業の発展に伴い急増する人口の受け皿として注目され、「半田市との連携市街地」として新しい町づくりが着々と進められていた頃だ。石川の北側は昭和五十二年(一九七七)に、南側は昭和六十二年(一九八七)に区画整理事業が完了し、以後、徐々に家が建ち並んでいった。そんな新しい町にやって来た新しい住民に憩いを提供しようと、桜の植樹が企図されたのだろう。

植樹からしばらくは武豊町が管理に当たっていたが、時を経て枯死したり倒木したりする桜も出てきた。そこで平成二十一年(二〇〇九)、住民自身が積極的に桜の保全に取り組んでいこうと結成されたのが「あじさいの会」である。会のルーツは二十年ほど前、大岩さんを中心に砂川地区の人たちが自主的に始めた石川の清掃活動に遡る。名前からも分かるとおり桜の保護だけなく、紫陽花や彼岸花、水仙も植え、四季を通して楽しめるよう力を入れてきた。現在は約二十人の会員で定期的な施肥、水やり、毛虫退治など、桜と川をいつまでも美しく保つため労を惜しまず地道な取り組みを続けている。

## グリーンベルトは桜のベルト

常滑市の北部には、農道沿いに延々と桜が続く場所が二か所ある。ひとつは、知多市日長台と常滑市字椎田奥(しいだおく)を結ぶ農道のうち、金山乗田交差点から前山ダムの少し南あたりまでの約一・八キロ。このうち一・五キロは一直線の道で、車で走っているとどこまでも延々と桜が続いているように錯覚する。もうひとつは矢田地区で、島田橋交差点から北池付近の知多市境まで、こちらも約一・八キロに及んでいる。どちらもなかなか壮観で、車を停めて桜を楽しむ人も多い。前山の桜並木沿いには専用駐車場も設けられている。

これらの桜並木は平成半ばに愛知県の緑化推進の一環として植樹されたのが始まりだが、そのきっかけとなったのは昭和四十年代後半から常滑市北部一帯で行われた「常滑市農村総合整備事業」である。かつてこのあたりは田畑と山林が入り混じる未開発の丘陵地だったが、農村環境の向上を目指して整然とした農地が造成され、灌漑(かんがい)設備や排水施設が整備された。この事業により何本かの大規模農道が開通し、その農道には「グリーンベルト」と呼ばれる緑地帯が設けられた。沿道の桜は、開通からしばらく未利用状態だったこのグリーンベルトを有効活用するために植樹されたものである。

前山では平成十年(一九九八)度から十三年度にかけて植樹が行われた。しかし、植樹後の手入れが行き届かず、草が伸び放題になってしまう。沿道に住む辻野郁男さんはこれを見かねて、個人で草刈りを始めた。いつしか前山地区の人たちも草刈りに参加するようになり、やがて「桜並木保存会」が結成されるまでになった。

保存会は現在、平成十九年(二〇〇七)に発足した「前山地域保全隊」の一部会として活動に取り組んでいる。「みんなで草刈りをしていると楽しいですね。熱中して時間を忘れてしまうほどです」と辻野さん。前山の土地に根を張った桜は、地域の人々の結びつきをより強くしてくれたのだろう。最近は保全隊で河津桜も追加植樹し、並木に新たな彩りを添えている。

## 桜のもとで地域がひとつに

一方、矢田の農道の桜並木は、前山よりも少し遅れて平成十六年(二〇〇四)度から植樹が始まった。しかし、これとは別に桜並木が

## 地域の人が育てた桜は、美しさもまた格別だ。

もう一か所あり、そちらはもう少し早い一九九〇年代後半から植樹されたという。それは、矢田川沿いの約三五〇メートルの桜並木である。川と田んぼに挟まれた未舗装の土手道は、実にのどかな雰囲気だ。ところどころにベンチも置いてあるので、春の日差しを浴びながら腰を下ろしてぼんやり桜を眺めるのもいいだろう。

この桜並木は、県道464号沿いにある洋菓子店「カレット」の先代店主だった故・水谷匡宏さんの発案で植樹が始まり、矢田の住民有志によって次第に増えていったものだ。匡宏さんは商売の傍ら地域活動にも熱心に取り組んでおり、生前を知る人に聞くと「地域の若手のリーダー的存在で、皆から頼られる人だった」という。矢田の象徴である矢田川をより誇れる場所にして地元を盛り上げたいと匡宏さんは考え、桜の植樹を思いついたのだろう。

これが矢田の人たちを巻き込み、平成十年（一九九八）、地域活動グループ「YATAコミュニティ」の発足へと繋がった。矢田川と農道の桜並木の保全活動に取り組んでいるのはこのグループで、現在は総勢約二十五名で草刈りや消毒、田んぼまで伸びた枝の剪定などを行っている。桜のほかにも、祭礼の時の出店や地区の花壇の手入れ、三和小学校児童との交流など活動内容は多岐にわたる。

会のメンバーは六十代から八十代が中心だが、現在の代表の水谷忠嗣さんは最若手の四十代だ。忠嗣さんは匡宏さんの息子で、カレットの四代目店主。会に参加したのは五年ほど前でまだ日が浅いが、「若い世代を後押ししたい」という〝先輩〟たちの強い思いに押され、三年前に代表を引き受けた。

忠嗣さんはこう話す。「自分が生まれ育った町が美しくなるのは嬉しいものです。自分より若い世代に受け継いでいけるよう、これからも活動していきたいですね」。桜並木は未来に向かって真っすぐに伸びている。

〈取材協力〉大岩保さん（あじさいの会）／辻野郁男さん（前山地域保全隊）／水谷忠嗣さん、平野勝章さん、村上孟さん（YATAコミュニティ）
〈参考文献〉南知多内海御案内（内海町役場・内海商工会）／第二次武豊町総合計画（武豊町）／回想一激動の半世紀 都市近郊における土地改良事業（水谷巌）／半田の大観（半田市）／奥条区常石車建造100周年記念誌（奥条区・常石車建造100周年委員会）